

近世後期～明治前期の農業記録にみる 経営実態とその変化

——上野国新田郡西鹿田村高橋家所蔵「田園覚帳」を事例として——

山 崎 達 夫

- I. はじめに
- II. 対象地域と史料の概要
 - (1) 対象地域の概要
 - (2) 史料の概要
- III. 文化～明治期における農業経営の実態
 - (1) 高橋家における所有耕地の分布
 - (2) 米生産と収穫量
 - (3) 畑作物の数と作付面積の変化
 - (4) 畑作物の作付順序
 - (5) 労働力の変化
 - (6) 高橋家における農業経営とその変化
- IV. おわりに
 - I. はじめに

近世農業の具体像を明らかにする史料の1つに農書がある¹⁾。農書は言うまでもなく、地域における農業の実状を踏まえた上で、地域農民に対する啓蒙的・指導的役割を担う目的をもった著書である。その内容は著者自身の営農経験に基づくものが多く、作付作物の選定、肥培管理法、輪作についてなど多項目にわたるため、農業実態や技術レベルを示す農書は、歴史学・農学などを中心に盛んに研究されてきた²⁾。

一方で、より詳細な農業経営の実態究明に対しては、農業記録や農事日誌が利用される。ただし、この農業記録は地主層の農民によって著述された場合が多く、地域もしくは村落全体への対応というより、むしろ、著述農民の営農記録という側面がきわめて強い。農書

が地域に向けた農業の指導書であるのに対して、農業記録は地主層を主体とした一農民の営農記録であると位置づけられる³⁾。

農書を本格的に地理学的研究に導入した有菌(1986)は⁴⁾、その著書で農書と農業記録の相違点にもふれ、農業記録は、耕地利用方式をかなり具体的に復原できるため、素データとしての意味をもつが、多くの農業記録が上層農民によって著されているために、著述された耕作法をもって、地域内でひろく行われた農業と位置づけることは適切ではないことを述べている。対して、農書は当該地域の全農家を対象としており、どの階層の農家でも適用できる技術がかなり含まれるため、地域性を解明する地理学的研究においては、農書がより適する研究対象であるとしている。

耕地利用方式の復原を農業経営分析の主たる目的とする場合、所有耕地の比定や条件が求められるとともに、史料の継続性が重要となる。しかし、農書を利用するだけではその記載の性格から自ずと限界があり、利用方式について詳細に書き留められた農業記録などを利用した農業経営の実態とその変化を把握することが要求される⁵⁾。

本稿では、近世の農業経営を耕地利用方式から解明するために、まず耕地利用の実態を詳細に捉え得る農業記録を利用することにした。そこで、上野国新田郡西鹿田村の高橋家に現存する農業記録「田園覚帳」を研究事例とし、高橋家の属する西鹿田村の耕地と所

表1 高橋家の所有耕地内容

等級	面積	石盛
上田	21.03	10
上畑	33.28	6
上畑	8.28	6
上畑	57.00	6
上畑	4.14	6
中畑	7.01	4.5
中畑	11.22	4.5
下ノ上畑	12.20	3
山新下々畑	160.16	0.5
山新下々畑	11.22	0.5
山	83.12	
屋敷	3.04	6
総計	415.20	

単位：畝歩

西鹿田行政区有文書：「明治五年地所一筆限取調帳」から作成

III. 文化～明治期における農業経営の実態

(1) 高橋家における所有耕地の分布

明治5年における高橋家の耕地は4町1反5畝20歩で、水田が2反1畝3歩、山を除いた畑地が3町1反1畝5歩である(表1)。ただし、畑地の中には「山」が接頭につく耕地の割合が多く、個人の刈敷や薪炭の供給地であったと考えられ、事実、地配図にこれらの耕地は記載されていない。これら山や山が接頭につく土地を除外した生産地としての畑地は、屋敷を含む1町3反8畝27歩で上畑を中心とした7筆からなる。耕地は屋敷から500m程度内に分布しており、耕地所有上は比較的有利であったといえる(図2)。

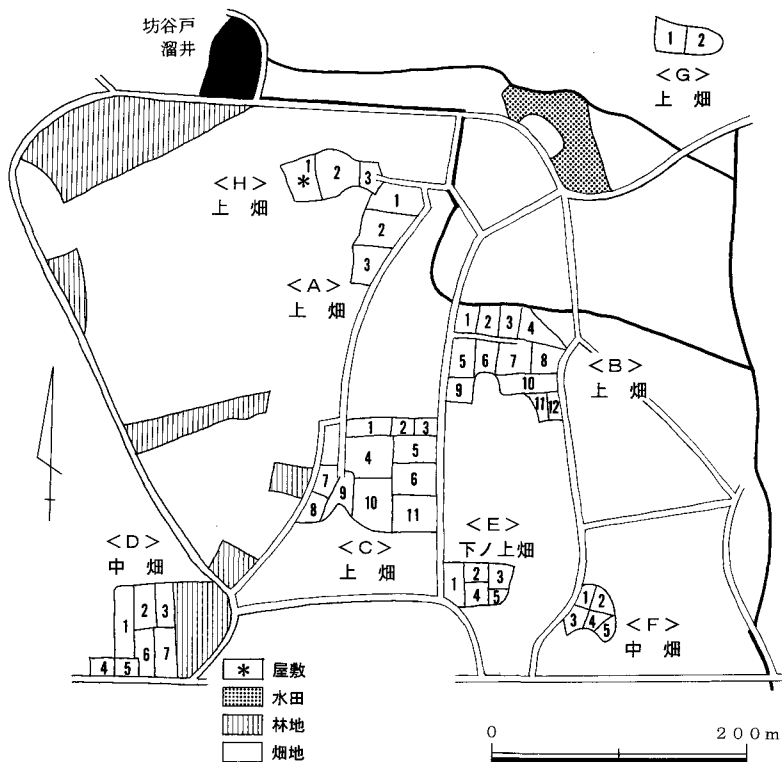


図2 高橋家の所有耕地の分布と等級

注1) 耕地番号は表3に対応

西鹿田行政区有文書：「明治五年地所一筆限取調帳」および「明治五年西鹿田絵図」から作成

(2) 米生産と収穫量

水田は屋敷北部の「坊谷戸」に2反歩余の上田を所有している。「田園覚帳」にはこの他にも水田が記載されているが、耕地の所在を確定できなかった。そこで、坊谷戸の水田についてのみ論ずることとする。西鹿田村の上田石盛は10であるが、15が一般的であり、およそ下田と下々田の中間値にあたることから、上田という等級であるが、きわめて低生産な水田であったといえる。

この水田の米収量の変化をみると(図3)、近世後期に至ってもなお、生産量にばらつきが多く、不安定であったことが読み取れる。ただし、面積から割り出される収穫量はおよそ反当たり2石程度であるから、ほぼ全年にわたって高い収穫量を維持していたことになる。これは技術的な側面、施肥ことに金肥の利用などに集約できるが、他方個人的に所有する林地から堆肥を作り、合わせて金肥を投下することによるメリットはかなりのものであったと想像し得る。「田園覚帳」の後記に農作業の指導書ともいべき項が付記されているが、そのなかに糠や油粕などを江戸から購

入していたことが記されており、これら金肥を導入していたものと考えられる⁹⁾。

(3) 畑作物の数と作付面積の変化

生産される畑作物の数は、文政年間後期から天保年間にかけて増加し、最大25種におよぶ(表2)⁹⁾。なかでも大豆・小豆などの豆類、粟・岡稲などの穀類が作付の中心を成し、9~10月にかけて裏作物である大麦・小麦が作付られ多収量を得ているが、地配図中には、裏作である大麦・小麦の記載が見られないため、具体的配置や作付面積はわからない。

文政元年~12年までは7種~最大10種で、平均しても8種類程度であるが、その中心は、大豆などの豆類、粟や岡稲などの穀類、荏やゴマなどの胡麻類、芋である。その他では木綿が安定的で、加えてソバの作付が若干見られる程度である。これを作付面積に対比すれば(図4)、全体の約3割程度が大豆を中心とする豆類、さらに全体の3割程度が粟と岡稲で占められる。芋が2割程度であるので、これら3種で全体の7割に達する。とくに、大豆は平均しても3割程度が全耕地中に作付ら

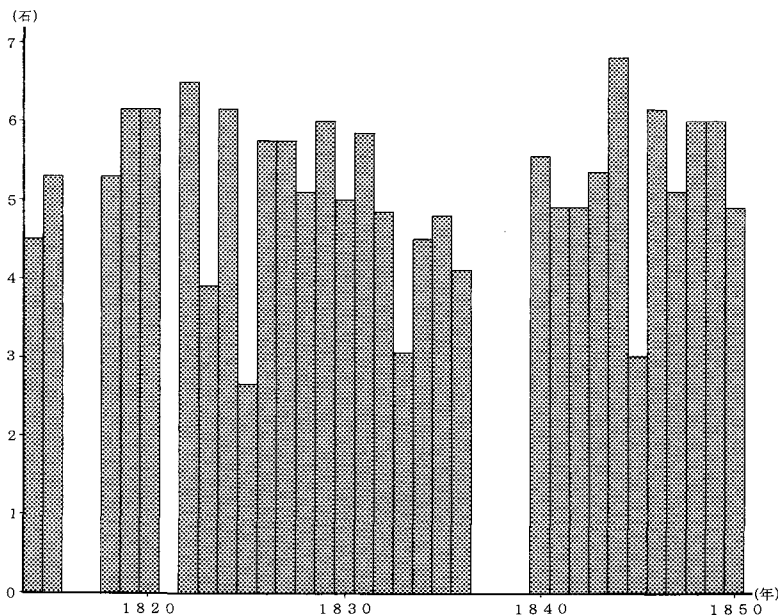


図3 高橋家の米収穫量の推移 高橋家所蔵:「田園覚帳」から作成

表2 田園覚帳にみられる畑作物の変化

年号	大豆	小豆	粟	陸稻	角豆	胡麻	木綿	芋	蕎麦	苳	大根	その他
文化11(1814)年	●	●	●	●								
文化12(1815)年	●	●	●	●								
文化13(1816)年	●	●	●	●								
文化14(1817)年	ND	ND	ND	ND	ND	ND	ND	ND	ND	ND	ND	ND
文政元(1818)年	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
文政2(1819)年	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
文政3(1820)年	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
文政4(1821)年	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
文政5(1822)年	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
文政6(1823)年	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
文政7(1824)年	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
文政8(1825)年	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
文政9(1826)年	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
文政10(1827)年	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
文政11(1828)年	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	SI/AS/MK
文政12(1829)年	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
天保元(1830)年	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	SI/NS/KK
天保2(1831)年	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	AS/MK
天保3(1832)年	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	MK/NS/ED
天保4(1833)年	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	NS
天保5(1834)年	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	NS/N
天保6(1835)年	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
天保7(1836)年	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
天保8(1837)年	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	N/TB
天保9(1838)年	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	MK/NS/TB
天保10(1839)年	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	KM
天保11(1840)年	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	NS/ED/KM
天保12(1841)年	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	NS/KM/NG
天保13(1842)年	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	AS/MK/NS/NG/MZ
天保14(1843)年	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	MK/KM/NG
弘化元(1844)年	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	SI/MK/NS/NG
弘化2(1845)年	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	NS/NG/MZ
弘化3(1846)年	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	MK/ED
弘化4(1847)年	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	NS/KB/AB
嘉永元(1848)年	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	MK/NG/MZ/AB
嘉永2(1849)年	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	AB
嘉永3(1850)年	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	NS/NG
嘉永4(1851)年	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	NG/MZ
嘉永5(1852)年	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	SI
嘉永6(1853)年	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	MK/MZ
安政元(1854)年	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	MK
安政2(1855)年	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
安政3(1856)年	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
安政4(1857)年	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
安政5(1858)年	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
安政6(1859)年	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	NS/ED/NG
萬延元(1860)年	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	NG
文久元(1861)年	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	NS
文久2(1862)年	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	NS
文久3(1863)年	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
元治元(1864)年	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	NS/N/NG
慶応元(1865)年	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	NG
慶応2(1866)年	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
慶応3(1867)年	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
明治元(1868)年	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
明治2(1869)年	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	MK
明治3(1870)年	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
明治4(1871)年	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	MK
明治5(1872)年	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	NS
明治6(1873)年	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	NS
明治7(1874)年	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
明治8(1875)年	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	NS/NG

注1) その他の欄のSI=さつまいも, AS=麻, MK=もろこし, NS=なす, KK=かき, ED=えんどう, N=菜, TB=煙草, KM=きみ, NG=ねぎ, MZ=めずら, KB=きび, AB=あぶらな, を示す。

高橋家所蔵:「田園覚帳」から作成

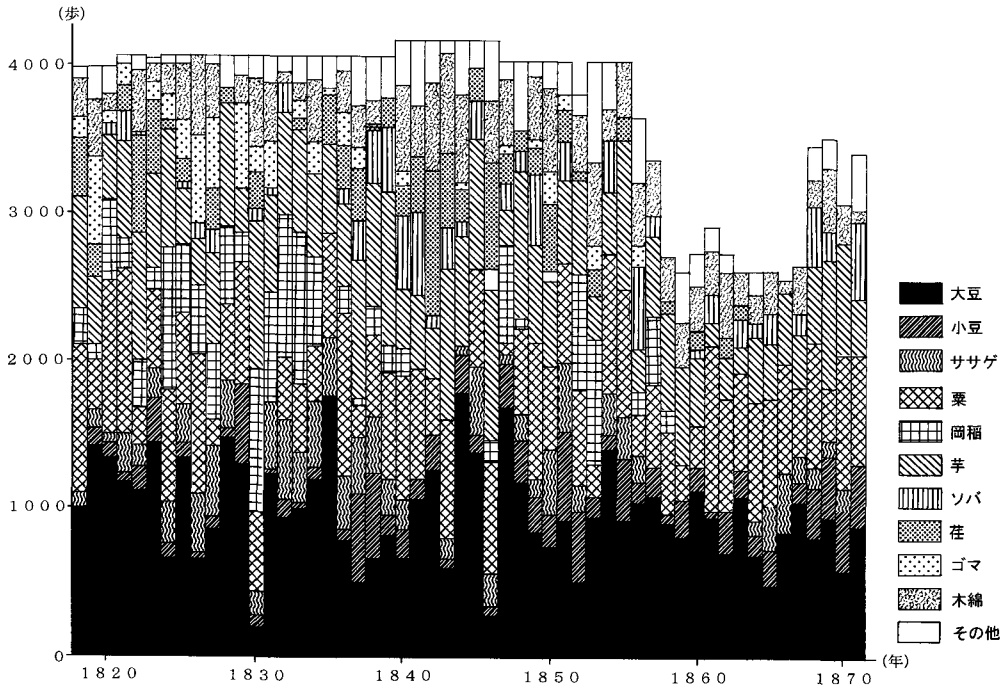


図4 高橋家の作物別作付面積の変化 高橋家所蔵：「田園覚帳」から作成

れ、高橋家における畑作物の中心をなしている。大豆の収穫量は毎年6俵程度と多く、食生活に欠かせない味噌・醤油・豆腐・大豆油・モヤシの原料であることから作付の中心におかれたものと考えられる。ただ、収量の6俵はいかにも多く、主要な換金作物の1つとなっていたことが想像できる。

天保元年～弘化4年までは10～16種にも達するが、耕地面積の増加とも相俟って平均13種類と増加をみせる。この場合の耕地面積の増加には、2側面ある。第1に、理由は不明であるが、耕地が増加したものである。地配図には記載されているが、耕地の位置は比定できなかった。第2は、天保11年まで、屋敷地としてのみ登記されていた土地が分筆をし、さらに作物の作付られる耕地として変化したことである。

これら耕地の増加が作物数に影響し、前時期までの大豆、粟と芋に表2のその他の欄で見られるような、ナスやネギなどの野菜類を初め、油菜・きび、柿・煙草に至るまでの増

加がみられる。また、大豆の作付面積に大きな変化はないが、粟や岡稲などの穀類が全体の3割から2割程度へ減少し、合わせて、1割程度を占めた胡麻類が大幅に減少している。とくに、岡稲は、天保6年、12年～弘化2年までの5年間には全く作付られなくなり、ササゲや胡麻なども作付られない年がみられるようになる。これらの減少に反して、木綿とソバの作付面積が増加したことが特筆され、とくに、木綿は天保後期に、1割5分程度にまで達し、全体の作付にとっても重要な地位を占めるようになった。

また、作物数が増加したことで、技術的な側面（生産法や肥培管理など）や労働力の側面が対応する形で変化したと考えられる。とくに木綿は、「農作業覚帳」によれば、連作障害が発生するのである程度の期間をおくか、多量の肥料が必要であるとされている。したがって、肥培管理上の変化、金肥の導入が図られたと考えることが妥当であろう。前述したが、高橋家の金肥（糠と油粕）購入を弘化

3年とすれば¹⁰⁾、この内容と一致する。

嘉永元年～慶応3年までは5～11種で、平均しても8種類で時代を経るにしたがい漸次減少するが、大豆、粟・岡稲と芋という基本的作付は共通しているが、大豆作付は相対的に減少し、他の作物とほぼ同じ割合になる。作物数は減少するが、前期の経験を踏まえて、作物数を淘汰したと考えるべきであり、表2に見られた多種の作物は、ナスやネギの野菜類とモロコシなどに限定され、豆類や穀類などの面積が回復傾向となるためである。岡稲とササゲの作付の減少は天保期以来続いていたが、安政6年以降、完全に消滅することも、作物淘汰の一事例であろう。

ただし、嘉永元年から高橋家では、小作を伴う経営に変化するため、安政3年頃から手作地が減少する。これは、高橋家の当主である長兵衛が嘉永4年に死去することに関係すると考えられる。小作地での作付に関しては記載が無いため判然としないが、小作地の増加が必然的に高橋家の作付を制限し、淘汰を促進したものと思われる。

明治元年～8年までは、5～8種で、平均しても7種である。前時期に継続して、作物数は淘汰され、大豆を中心に小豆、粟と芋、木綿・ソバという型に固定する。全体の割合には大きな変化がなく、大豆が3割弱、小豆1割、粟・芋で5割、木綿・ソバが残りの1割強を占め、大根やナスなどの野菜類の作付は継続される。

以上、文政元年～12年までの第I期は、大豆を基幹に粟などの穀類と芋を中心とした自家消費作物に、木綿・蔬菜類などの市場性の高い作物を若干加えた経営形態として捉え得る。次いで天保元年～弘化4年までの第II期は、前時期同様に大豆を基幹とし、粟と芋を中心に、平均13種類にもおよぶ作付にも増して、木綿・ソバなどの市場性を重視した多種類化を果たした経営へと変化した。嘉永元年～慶応3年までの第III期は、基幹であった

大豆が減少し、さらに岡稲を代表とする穀類生産も減少し、市場性の高い木綿・ソバなどが従来以上に拡大した少種類多量生産期として捉えることができる。明治元年～8年までの第IV期は、バランスのとれた作付を前III期に継続して行なうが、それまでの小作地を手作地に戻すことによって、作付面積を相対的に増加させることとなった。

(4) 畑作物の作付順序

高橋家の所有耕地はA～Hまでの8地区に区分され、耕地等級は上畑が5地区と多く、中畑2地区、下ノ上畑1地区の順である。また、図4に示したごとく、作物の中心は大豆であるので、この大豆を軸として、作付順序の特徴を見ることにしたい¹¹⁾(表3)。

A地区は8畝28歩(3筆)の上畑である。大豆は3年1作または2年1作であり、大豆の前後年作は穀類(粟・岡稲)と芋である。この順序は文政期まで継続するが、天保2年には大豆に代わって胡麻とササゲが入り込む。さらに、天保11・12年にはそれまで見られなかった芋の連作が出現し、次いで13年からは大豆の3年連作が見られる。天保期に入って、作付が乱れるだけでなく、それまであえて避けてきた連作を行っている点が特筆される。弘化元年以降は2年1作の後に大豆ではなく、その他の豆類が作付られ、元治期まで継続するが、慶応期に入って、A地区に木綿が導入されたことによって、後年作に大豆が作付られる。慶応期以降、大豆の作付面積は減少しており、木綿の作付拡大が、大豆の地位を低下させることとなった。

B地区は5反7畝歩(12筆)の上畑で、高橋家最大の畑地である。ほぼ毎年、大豆の作付が見られ、A地区同様に木綿の後年作でもある。天保元年以降は、木綿の作付が増加することと相俟って、大豆は3年に1度程度に減少し、4年に1度は大豆作の全くない年が見られるようになった。しかし、天保13年ごろ

表3 田園覚帳にみられる作付作物

地区	番号	文政元	文政2	文政3	文政4	文政5	文政6	文政7	文政8	文政9	文政10	文政11	文政12	天保元
A	1	粟	大豆	岡稲	粟	大豆	芋	大豆	小豆	大豆	ゴマ	芋	大豆	岡稲
	2	粟	大豆	岡稲	大豆	粟	小豆	芋	大豆	岡稲	大豆	芋	大豆	岡稲
	3	粟	大豆	岡稲	大豆	粟・ナス	芋	ゴマ	ササゲ	岡稲	小豆	芋	小豆	岡稲
B	1	荏	大豆	粟	大豆	芋	大豆	岡稲	大豆	粟	ササゲ	芋	大豆	岡稲
	2	芋	ナス	粟	大豆	芋	小・ナス	岡稲	大豆	粟	大豆	芋	大豆	岡稲
	3	芋	大豆	粟	ササゲ	芋	大豆	岡稲	大豆	粟	木綿	大豆	芋	芋
	4	芋	大豆	粟	大・小	芋	大・ササゲ	岡稲	ササゲ	粟	木綿	大豆	芋	ササゲ
	5	荏	大豆	粟	大・根	芋	ササゲ	岡稲	大豆	粟	ササゲ	大豆	大豆	岡稲
	6	芋	岡・小	粟	大豆	芋	小豆	岡稲	大豆	粟	ササゲ	芋	瓜	岡稲
	7	大豆	ゴマ	芋	大・ソバ	ゴマ	大豆	粟	芋	ゴマ	大豆	岡稲	ササゲ	大・カイ
	8	木綿	大・根	芋	大・ソバ	ゴマ	岡稲	大・綿	ササゲ	芋	ササゲ	岡・大	胡麻	粟・大
	9	根・荏	芋	角・根	粟	小・根	ゴマ	ササゲ	荏	ササゲ	根・芋	岡稲	ササゲ	ゴマ
	10	小豆	ゴマ	大豆	粟	木綿	大豆	芋	粟	木綿	岡稲	大豆	ゴマ	芋
	11	小豆	ゴマ	大豆	粟	木綿	大豆	芋	粟	木綿	岡稲	大豆	ゴマ	芋
	12	ゴマ	ゴマ	大豆	粟	ゴマ	大豆	芋	粟	木綿	岡稲	大豆	ゴマ	芋
C	1				大豆	岡稲	荏	大豆	粟	ササゲ	芋	大・小	岡稲	ササゲ
	2	岡稲	大豆	粟	ゴマ	大豆	芋	大豆	ササゲ	芋	大・瓜	粟	大・ササゲ	木綿
	3	岡稲	大豆	粟	粟	大豆	芋	粟	大豆	ゴマ	芋	ササゲ	粟	木綿
	4	大豆	粟	岡稲	芋	小豆	粟	ゴマ	岡稲	大豆	粟	ササゲ	粟	ゴマ
	5	粟	大豆	岡稲	粟	大豆	芋	粟	大豆	ゴマ	芋	大豆	粟	木綿
	6	粟	大豆	岡稲	粟	大豆	芋	粟	大豆	ゴマ	芋	大豆	粟	木綿
	7	芋	荏	小・ソバ	荏	ササゲ	ゴマ	芋	岡稲	ササゲ	荏	モロコシ	粟	芋
	8	芋	荏	小・ソバ	荏	大豆	ゴマ	芋	岡稲	ササゲ	荏	モロコシ	粟	芋
	9	大豆	粟	大豆	芋	大豆	粟	ササゲ	岡稲	大豆	荏	大豆	岡稲	ゴマ
	10	粟	粟	大豆	芋	大豆	粟	ササゲ	岡稲	ササゲ	粟	大豆	粟	小豆
	11	粟	大豆	岡稲	粟	大豆	芋	粟	大豆	ゴマ	芋	大豆	粟	綿・菜
D	1	大豆	芋	大豆	岡稲	大豆	粟	大豆	芋	岡稲	大豆	粟	ササゲ	芋
	2	大豆	芋	大豆	ゴマ	大豆	粟	荏	芋	岡稲	大・ソバ	粟	ササゲ	芋
	3	ササゲ	芋	大豆	ササゲ	荏	ゴマ	芋	ササゲ	岡・ゴマ	大・ササゲ	荏	ササゲ	荏
	4	大豆	芋	芋	岡稲	大豆	粟	小豆	芋	岡稲	大豆	粟	ササゲ	芋
	5	大豆	芋	大豆	岡稲	大豆	粟	小豆	芋	岡稲	大豆	粟	ササゲ	芋
	6	大豆	芋	大豆	岡稲	ササゲ	粟	大豆	芋	岡稲	大豆	粟	ササゲ	芋
	7	ササゲ	芋・荏	芋	ササゲ	荏	ゴマ	芋	ササゲ	ゴマ	大・ササゲ	荏	ササゲ	ゴマ
E	1	粟	木綿	大豆	芋	岡稲	大豆	粟	木綿	大豆	ゴマ	芋	大豆	粟
	2	粟	木綿	大豆	芋	岡稲	大豆	粟	木綿	大豆	ゴマ	芋	大豆	粟
	3	粟	木綿	大豆	芋	荏	大豆	粟	木綿	大豆	ゴマ	ササゲ	大豆	粟
	4	粟	木綿	大豆	芋	岡稲	大豆	粟	木綿	大豆	ゴマ	岡稲	大豆	粟
	5	粟	木綿	大豆	芋	荏	大豆	粟	木綿	大豆	ゴマ	ササゲ	大豆	粟
F	1	岡稲	小豆	ゴマ	粟	大豆	胡麻	大豆	大・ソバ	粟	木綿	岡稲	大豆	粟
	2	荏	大豆	ゴマ	粟	大豆	胡麻	大豆	大・ソバ	粟	木綿	岡稲	大豆	粟
	3	大豆	ゴマ	芋	大豆	粟	木綿	大豆	ゴマ	芋	大・ソバ	粟	木綿	岡稲
	4	大豆	粟	木綿	大豆	粟	木綿	大豆	ゴマ	芋	大・ソバ	粟	木綿	岡稲
	5	大豆	粟	木綿	大豆	粟	木綿	大豆	ゴマ	芋	大・ソバ	粟	木綿	岡稲
G	1	木綿	ササゲ	木綿	大豆	木綿	大豆	木綿	大豆	木綿	大・ソバ	粟	大豆	木綿
	2	木綿	ササゲ	木綿	ササゲ	木綿	大豆	木綿	大豆	木綿	大・ソバ	粟	大豆	木綿
H	1													
	2													
	3													

注1) 表中の耕地地区および番号は、図2に対応。

2) 表中の空欄は、記載なしを示す。

3) 簡略化した作物は、大豆一大、小豆一小、岡稲一岡、木綿一綿、大根一根、ササゲ一ササ、角豆一角、ソバ一ソ、モロコシ一モロ、メズラーメズ、カキ一カ、荏胡麻一荏、芋一イ、サツマイモ一サツマ、春ソバ一春ソ、冬エンドウ一冬エ、センザイ一センで示した。

高橋家所蔵：「田園覚帳」から作成

天保2	天保3	天保4	天保5	天保6	天保7	天保8	天保9	天保10	天保11	天保12	天保13	天保14	弘化元
ゴマ	芋	大豆	岡稲	大豆	小豆	大豆	小豆	大豆	芋	芋	大豆	大・サ	大豆
ササグ	芋	大豆	岡稲	大豆	粟	小豆	岡稲	大豆	芋	芋	大豆	大豆	大豆
ササグ	芋	大豆	岡・大	大豆	苳	小豆	芋	大豆	粟	大豆	苳	芋	大豆
大豆	芋	大豆	コ・マ・サ	ササグ	粟	小豆	芋	ソバ	粟	大豆	苳	芋	大豆
大豆	粟	ササグ	岡稲	大・サ	粟	苳	芋	ソバ	粟	大・ソバ	コ・マ・サ	芋	大豆
ゴマ	岡稲	大豆	ゴマ	根・菜	芋	苳	芋	ソバ	粟	ソバ	綿・サ	芋	大・根
ササグ	芋	大豆	芋	粟	芋	大豆	芋	ササグ	粟	小豆	苳	芋	大豆
大豆	粟	ササグ	大豆	大豆	粟	小豆	芋	大・根	ナス	大豆	苳	芋	大・サ
芋	角・瓜	岡稲	大豆	大豆	サ・根	芋	大豆	粟	小・コ・マ	大豆	苳	芋・粟	木綿
芋	岡稲	コ・マ・苳	大豆	粟	粟・綿	芋	大豆	粟	木綿	大豆	苳・綿	粟	苳・サ
芋	ササグ	岡稲	大豆	粟	芋・綿	サ・苳	大・ソバ	キミ	ソバ・根	ソバ	ササグ	粟	木綿
大・サ	岡稲	粟	木綿	大豆	粟	木綿	大豆	粟	木綿	岡稲	大豆	粟	木綿
大豆	岡稲	粟	木綿	大豆	粟	木綿	大豆	粟	木綿	キミ	大豆	粟	木綿
大豆	岡稲	粟	木綿	大豆	粟	ゴマ	大豆	粟	木綿	キミ	大豆	粟	木綿
芋	小豆	岡稲	大豆	芋	大豆	芋・ソバ	大豆	芋	小・コ・マ	粟	大豆	苳	小豆
岡稲	小豆	芋	大豆	芋	大豆	芋	ササグ	岡稲	ササグ	サ・麻	大・サ	苳	芋
岡稲	ササグ	芋	大豆	芋	ササグ	芋・粟	大豆	ササグ	ササグ	粟	木綿	大・サ	芋
岡稲	大豆	芋	小豆	芋	大豆	芋・岡	ササグ	岡稲	大豆	粟	木綿	ササグ	芋
岡稲	大・サ	芋	大豆	粟	大豆	ソバ	ササグ	芋	大豆	粟	木綿	大豆	芋
岡稲	大豆	芋	ササグ	粟	大・サ	芋	サ・サ	芋	大豆	粟	木綿	大豆	芋
岡稲	サ・ソバ	モロコシ	大豆	苳	ササグ	芋	ソバ	苳	ソバ	ソバ	苳	ソバ	芋
芋・麻	サ・ソバ	大根	ササグ	苳	ササグ	煙草	煙草	苳	ソバ	ソバ	苳	ソバ	芋
芋	ササグ	岡稲	大豆	芋	大豆	芋・ソバ	大豆	芋	小豆	粟	大豆	苳	小豆
岡稲	大豆	芋	サ・菜	ナス	大豆	芋	芋	芋	大豆	粟	ササグ	苳	大豆
岡稲	大豆	芋	ササグ	粟	大豆	芋	サ・根	芋	大豆	粟	木綿	大・根	芋
大豆	岡稲	大豆	芋	ササグ	岡稲	大豆	粟・ソバ	小豆	芋	大豆	芋	大豆	苳
大豆	岡稲	ササグ	芋	大豆	岡稲	粟・ソバ	ソバ	ササグ	苳	大豆	芋	苳	大豆
大・ソバ	コ・マ・モ	ゴマ	芋・サ	苳	岡・大	モロコシ	ソバ	ソバ	苳	大・ソバ	芋	苳・ソバ	大豆
大豆	岡稲	大豆	芋	大豆	ソバ	大豆	粟	小豆	キミ	大豆	芋	大豆	苳
大豆	岡稲	大豆	芋	大豆	ソバ	大豆	粟	小豆	芋	大豆	芋	小豆	苳
大豆	岡稲	小豆	芋	大豆	岡稲	粟・ソバ	粟	ササグ	苳	大豆	芋	苳	大・ソバ
大・ソバ	コ・マ・モ	芋	ササグ	苳	大豆	モロコシ	ソバ	ソバ	ソバ	ソバ	芋	ソバ	大豆
木綿	大豆	岡稲	粟	大豆	苳	ササグ	粟	芋	大・ソバ	苳	粟	木綿	大豆
木綿	大・小	岡稲	粟	大豆	ゴマ	ササグ	粟	芋	大・ソバ	苳	粟	木綿	ソバ
木綿	大豆	岡稲	粟	大豆	ゴマ	ササグ	粟	芋	大・ソバ	苳	粟	木綿	大豆
木綿	大豆	岡稲	粟	大豆	苳	ササグ	粟	芋	大・ソバ	苳	粟	木綿	大豆
木綿	大豆	岡稲	粟	大豆	ゴマ	ササグ	粟	芋	大・ソバ	苳	粟	木綿	大豆
ゴマ	大豆	粟	ササグ	コ・マ・苳	芋	大・根	コ・マ・ソバ	キミ	芋	木綿	大・ソバ	木綿	モロコシ
ゴ・マ・綿	大豆	岡稲	ササグ	コ・マ・苳	芋	大・ソバ	苳・綿	キミ	芋	木綿	大・根	粟・ソバ	ゴマ
大豆	粟	木綿	岡稲	ササグ	芋	粟	木綿	大豆	芋	木綿	大・ソバ	木綿	ササグ
大豆	粟	木綿	岡稲	ササグ	芋	粟	木綿	大豆	芋	木綿	大・ソバ	木綿	小豆
コ・マ・小	粟	木綿	岡稲	ササグ	芋	粟	木綿	大豆	芋	木綿	大・ソバ	木綿	小豆
大・サ	綿・冬エ	岡稲	大豆	芋	木綿	大・サ	モロコシ	大豆	粟	木綿	大豆	木綿	大豆
大・サ	綿・冬エ	岡稲	大豆	芋	木綿	大・サ	モロコシ	春ソバ	粟	木綿	大豆	木綿	大豆
									春ソバ	キミ	芋	大豆	芋
									春ソバ	キミ	芋	大豆	芋
									春ソバ	キミ	芋	大豆	芋

地区	番号	弘化2	弘化3	弘化4	嘉永元	嘉永2	嘉永3	嘉永4	嘉永5	嘉永6	安政元	安政2	安政3	安政4
A	1	ササゲ	芋	大豆	芋	大豆	苳	小豆	岡稲	大豆	芋	大豆	粟	大豆
	2	小豆	粟	小豆	芋	大豆	苳	小豆	岡稲	大豆	芋	大豆	粟	大豆
	3	小・ヌ	粟	小豆	芋	大豆	苳	小豆	岡稲	大豆	芋	大豆	粟	大豆
B	1	芋	苳	大豆	芋	大豆	粟	大豆	岡稲	大豆	芋	ササゲ	秋ソハ	粟
	2	芋	苳	大豆	芋	大豆	粟	ササゲ	岡・芋	大豆	粟	ササゲ	岡稲	
	3	芋・ソバ	苳	大豆	カハ・根	ソバ	粟	ササゲ	粟・芋	ネギ	粟	ササゲ	ヒソイ	
	4	ソバ	芋	大豆	カハ・根	粟	カハ・根	ネギ	岡稲	ネギ	ソバ	苳	秋ソハ	岡稲
	5	大豆	苳	大豆	芋	大豆	芋	小豆	芋	芋	粟	小豆	大根	粟
	6	大豆	苳	大豆	芋	大豆	粟	ササゲ	芋	苳	大豆	粟	秋ソハ	岡稲
	7	大豆	粟・芋	苳・ヌ	大豆	粟・カハ	ゴマ・ヌ	大豆	芋	ゴマ	大豆	粟	秋ソハ	大豆
	8	大豆	芋	苳	大豆	粟	木綿	大・根	サマ	木綿	大豆	粟	ゴマ	大豆
	9	大豆	粟	芋	ササゲ	粟	ゴマ	大豆	粟	サマ・芋	粟	小豆	大根	春ソハ
	10	大豆	芋	岡稲	大豆	粟	木綿	大豆	粟	木綿	大豆	粟	木綿	大豆
	11	大豆	芋	岡稲	大豆	粟	木綿	大豆	粟	木綿	大豆	粟	木綿	大豆
	12	大豆	芋	岡稲	大豆	粟	木綿	大豆	粟	木綿	大豆	粟	木綿	大豆
C	1	芋	大豆	岡稲	小豆	苳	大豆	芋	小豆	岡稲	大豆	芋	大豆	粟
	2	苳	大豆	岡稲	小豆	芋	大豆	粟	小豆	岡稲	大豆	芋	大豆	木綿
	3	大豆	粟	木綿	サ・サ	芋	大豆	粟	ササゲ	岡稲	大豆	芋	ササゲ	木綿
	4	大豆	サ・サ	岡・ヌ	大豆	芋	大豆	苳	大豆	岡稲	大豆	芋	大豆	粟
	5	角豆	粟	木綿	大豆	芋	ササゲ	粟	大豆	岡稲	ササゲ・赤	芋	大豆	木綿
	6	サ・ヌ	粟	木綿	大豆	芋	ササゲ	粟	大豆	岡稲	ササゲ・赤	芋	大豆	岡稲
	7	ササゲ	キビ	ソバ	モロコシ	ソバ	苳	ソバ	小豆	モロコシ	モロコシ	芋	荒地	
	8	ササゲ	キビ	ソバ	モロコシ	ソバ	苳	ソバ	小豆	モロコシ	モロコシ	芋	荒地	
	9	芋	大豆	粟	小豆	小豆	大豆	ゴマ	小豆	岡稲	大豆	芋	大豆	粟
	10	芋	ナス	ゴマ・小	サ・ヌ	ネギ	大豆	粟	ササゲ	岡稲	大豆	芋	ササゲ	木綿
	11	ササゲ	粟	木綿	大豆	芋	ササゲ	粟	大豆	岡稲	ササゲ・黒	芋	大豆	岡稲
D	1	大豆	芋	大豆	苳	小豆	芋	大豆	岡稲	小豆	モロコシ	大豆	小豆	芋
	2	粟	岡稲	大豆	粟	ササゲ	芋	苳	岡稲	モロコシ	モロコシ	大豆	芋	小豆
	3	粟	サ・サ	大・サ	粟	サ・ソハ	芋	苳・ソハ		モロコシ	モロコシ	大豆	芋	小豆
	4	大豆	芋	大豆	苳	小豆	芋	大豆	苳	小豆	春ソハ	大豆	小豆	芋
	5	大豆	芋	大豆	苳	小豆	芋	大豆	岡稲	小豆	春ソハ	大豆	小豆	芋
	6	粟	岡稲	大豆	粟	角豆	芋	苳		苳	春ソハ	大豆	芋	小豆
	7	ソバ	キビ	大・サ	粟	ソバ	芋	ソバ		モロコシ	春ソハ	大豆	芋	小豆
E	1		エトウ	小豆	粟	木綿	小豆	芋	木綿	大豆	粟	木綿	大豆	芋
	2		木綿	大豆	粟	木綿	小豆	芋	木綿	大豆	粟	木綿	大豆	芋
	3		木綿	大豆	粟	木綿	ササゲ	芋	木綿	大豆	粟	木綿	大豆	芋
	4		木綿	大豆	粟	木綿	小豆	芋	木綿	大豆	粟	木綿	大豆	芋
	5		木綿	大豆	粟	木綿	ササゲ	芋	木綿	大豆	粟	木綿	大豆	芋
F	1		ソバ	綿・根	大・芋	ゴマ	芋	サ・根	芋	粟	木綿	大豆		隠居分
	2		ソバ	木綿	大豆	ゴマ・ヌ	芋	大豆	芋	粟	木綿	大豆		隠居分
	3		木綿	大豆	芋	苳	大豆	粟		粟	木綿	大豆		隠居分
	4		木綿	大豆	芋	苳	大豆	粟	大豆	粟	木綿	大豆		隠居分
	5		木綿	大豆	芋	木綿	大豆	粟		粟	木綿	大豆		隠居分
G	1	苳	大ササゲ	勿刈入	小作	弥七作								四郎次
	2	苳	春ソハ	勿刈入	小作	弥七作								四郎次
H	1	芋	岡稲	芋	大豆	芋	大豆	芋	大豆	芋	小豆	大豆	芋	大豆
	2	芋	小豆	芋	岡稲	芋	大豆	芋	大豆	芋	小豆	大豆	芋	大豆
	3	芋	小豆	芋	岡稲	芋	大豆	芋	大豆	芋	小豆	大豆	芋	大豆

安政 5	安政 6	万延元	文久元	文久 2	文久 3	元治元	慶応元	慶応 2	慶応 3	明治元	明治 2	明治 3	明治 4
芋	小豆	芋	大豆	芋	大豆	粟	小豆	木綿	大豆	芋	大豆	木綿	芋
芋	小豆	芋	大豆	芋	大豆	粟	木綿	大豆	木綿	大豆	芋	木綿	大豆
芋	小豆	芋	大豆	粟	大豆	粟	木綿	大豆	木綿	大豆	芋	木綿	大豆
芋	大豆	芋	大豆	粟	大豆	粟	小豆	芋	大豆	芋	大豆	粟	芋
		ネギ	袴・ナ	粟					岩蔵入	妙・春	ハ・大	粟	小豆
岩蔵入									岩蔵入	根・袴	ハ・大	粟	小豆
岩蔵入									岩蔵入	粟	大豆	粟	小豆
芋	大豆	苳	大豆	粟	大豆	粟	大サガ	芋	大豆	芋	大豆	粟	芋
大豆	ネギ	木綿	大豆	粟	小豆	粟	大サガ	粟	小豆	春ハ	木綿	小豆	春ハ
岡稻	粟	木綿	大豆	大根	ハ・綿	ハ・袴	粟・春	大サガ	大豆	芋	木綿	小豆	春ハ
粟	大豆	大豆	粟	苳	木綿	大豆	粟		木綿	大豆	木綿	小豆	春ハ
岩蔵入									柴蔵				粟
粟	大根	大豆	粟	木綿	大豆	大・芋	粟・春	粟	大豆	粟	小豆	芋	大豆
粟	木綿	大豆	粟	木綿	大豆	芋	粟	大豆	大豆	粟	小豆	芋	大豆
粟	木綿	大豆	粟	木綿	大豆	芋	粟	大豆	大豆	粟	小豆	芋	大豆
苳	芋	大豆	粟	小豆	粟	春ハ	芋	大豆	粟	小豆	芋	大豆	粟
大豆	芋	大豆	粟	大豆	芋	大豆	芋	大豆	粟	大豆	芋	大豆	粟
大豆	芋	粟	木綿	大豆	粟	大豆	芋	粟	大サガ	粟	木綿	ササゲ	粟
大豆	芋	大豆	粟	大豆	粟	大豆	粟	大サガ	粟	大豆	芋	大豆	粟
大豆	芋	大豆	粟	大豆	苳	大豆	芋	大サガ	粟	小豆	芋		春ハ
木綿	大豆	粟	木綿	大豆	粟	木綿	大豆	芋	粟	粟	大豆	粟	大豆
								荒地		春ハ	モコシ		モコシ
								荒地		春ハ	モコシ		モコシ
大豆	粟	大豆	粟	小豆	粟	大豆	粟	大サガ	大サガ	小豆	芋	芋	大豆
木綿	大豆	大豆	粟	大豆	粟	ササゲ	大豆	大豆	芋	粟	芋	大豆	粟
木綿	大豆	大根	春ハ	大豆	粟	木綿	大豆	芋	大サガ	粟	大豆	粟	大豆
大豆	芋	芋	小豆	芋	大豆	小豆	小豆	大豆	粟	芋	大豆	芋	
大豆	芋	ソバ	小豆	粟	小豆	粟	大豆	粟	春ハ	大豆		芋	
大豆								粟	春ハ	小豆			
大豆	芋	小豆	芋	大豆	芋	小豆	大豆	粟	芋	大豆	粟		
小豆	芋	小豆	芋	大豆	芋	小豆	大豆	粟	芋	大豆	粟	芋	
大豆	油な	芋	春ハ	粟	ソバ	粟	春ハ	粟	芋・春	小豆	粟		
大豆			春ハ		ソバ			粟		小豆	ソバ		
重次郎入									彦吉入	作			
重次郎入									彦吉入	作			
重次郎入									彦吉入	作			
重次郎入									彦吉入	作			
重次郎入									彦吉入	作			
岩蔵入									柴蔵入		粟	大豆	木綿
岩蔵入									柴蔵入		粟	大豆	木綿
岩蔵入									柴蔵入		粟	大豆	粟
岩蔵入									柴蔵入		粟	大豆	粟
岩蔵入									柴蔵入		粟	大豆	粟
四郎次入									四郎次入	作	大サガ	芋	ササゲ
四郎次入									四郎次入	作	大サガ	芋	ササゲ
芋	大豆	粟	大豆	芋	大豆	芋	木綿	大豆	芋	木綿	大豆	芋	大豆
芋	大豆	粟	大豆	芋	大豆	芋	木綿	大豆	芋	木綿	大豆	芋	大豆
芋	大豆	粟	大豆	芋	大豆	芋	木綿	大豆	芋	木綿	大豆	芋	大豆

から大豆生産は、4年1作から3年1作に戻り、木綿の後年作として、木綿—大豆—粟・岡稲の一連の順序が確立する。一方、慶応期からは木綿の作付が停滞する代わりに連作を含む大豆作が増加に転じる。

C地区は3反3畝28歩（11筆）の上畑で、B地区に次いで大きな面積をもつ。大豆は基本的に2年1作であり、文政9年ごろまでは地区としてほぼ毎年作付られているが、天保元年に木綿が導入されると、他地区同様に、3年1作に周期が延びる。大豆は木綿の後年作として位置づけられ、木綿—大豆—粟という一連の順序が維持される。他方、木綿同様にこの時期ごろから導入されるソバについては、大豆を含まない独自の作付順序であり、芋と荳との組み合わせであって、ササゲを含むが大豆は作付られない。慶応期から木綿が減少すると、大豆は地区内で毎年作付られるようになることから、木綿との相互関係が重要であったと考えられる。

D地区は1反1畝22歩（7筆）の中畑である。大豆は2年1作であり、前後年作は穀類の粟・岡稲、芋、ゴマ・荳、ソバなどが作付られる。大豆と前後年作を組む作付順序を4回（8年）繰り返すと、9年目に大豆は作付られず、代わって、同類の小豆・ササゲに代わる。弘化4年からは、それまでの2年1作の作付順序から4年1作となり、文久期に入ると、3年1作へと更なる変化を遂げる。天保期頃より作付面積を減少させ、他作物へと転換したことが、大豆の地位を低下させることに結びついていると考えられる。

E地区は1反2畝20歩（5筆）の下ノ上畑である。大豆はほぼ3年1作であって、前年作は木綿、後年作は粟を中心に、他種類にわたっている。この地区では、文政初期から木綿が作付の1つを担っており、大豆を組み合わせた、粟—木綿—大豆の一連の順序が当初から確立している。ただし、木綿は天保5年以降、11年間作付られず、ゴマやソバなどが

それに代わるが、大豆には大きな変化はない。天保14年からはそれまでの3年周期に戻っているが、安政5年以降は小作地化した。また、下ノ上畑という低位な等級に対応した特別な作物は見いだせなかった¹²⁾。

F地区は7畝1歩（5筆）の中畑である。1～2耕地では、文政10年まで木綿が導入されず、粟・岡稲—大豆—ゴマの基本型をもっており、大豆3年1作とおおむね見られるが、順序に明確さを欠く。10年以降木綿が導入されるとさらに著しくなり、以後一定の順序をもたない。3～5耕地は粟—木綿—大豆の3年周期が繰り返され、文政11年より綿の後年作に岡稲が入り、4年1作へと変化する。大豆に代わり、ササゲが作付られる場合と大豆とソバの混作の場合、粟に代わり、芋の作付が見られるようになる。また、天保9年からは木綿作の間隔がそれまでの4年1作から3年、さらに2年へと短縮され、極端な木綿—大豆の型が形成される。その後は3年1作となり、嘉永2年以降は、前述の4年1作に戻るが、安政3年以降小作地化するため、作付の実際はわからない。

G地区は4畝14歩（2筆）の上畑である。文政元年より導入された木綿は、大豆との組み合わせであり、F地区で見られた3年1作よりも、短縮された2年1作、木綿—大豆を基本的に繰り返す。大豆に代わって、ササゲ・粟が入る場合もあるが、天保3年までは、ほぼこの順序を踏襲する。天保4年～11年での木綿は、4年1作となり、代わってソバ・芋・モロコシなどが作付られる。天保12年以降は、従来の2年1作（木綿—大豆）に戻る。ただし、弘化4年以降は小作地化する。

G地区では他地区と異なり、木綿の2年1作が基本的には大豆と組み合わせられることによって成立していた。天保4年からは作付順序が乱れるが、他地区のような木綿・大豆の短縮作付ではなく、逆に、その期間をのぼす方向性が見られた。これは他に見ることので

きない特殊な形態といえよう。

H地区は3畝4歩(3筆)の上畑である。当地区は天保10年まで「田園覚帳」に記載されていない屋敷地である。その作付順序は、天保12年より、芋一大豆と2年周期で繰り返され、大豆の代わりに小豆や岡稲、芋の代わりに粟が作付られることはあるものの、基本順序はほぼ変わらない。他地区で見られた天保期以降の順序の乱れもないといつて差し支えない。ただし、慶応元年以降、木綿導入を契機に芋一木綿一大豆に変化する。

各地区ごとの基本的順序は、2年、3年、4年、8年周期とその間隔に開きが見られ、大豆を基本にした作付が繰り返される共通項が認められた。木綿も作付順序を決定する要因の一つとなっていた。当初から木綿が作付られた地区では、その後も大きな変化を見ることがないが、木綿導入期以降、一地区を例外として、作付順序が変化し、木綿の作付により、それまでよりも一年長い周期へと適応した。したがって、大豆と木綿の組み合わせこそが、高橋家の作付順序を支配していたといえるであろう。また、天保～弘化期では、作付順序がどの地区でも軒並み乱れ、それ以

前とは異なる作付が行われると同時に、周期は延長され、基幹である大豆の作付も不安定となる。この時期に大きな変化が見られることについて、経営方針の変化や天保の大飢饉の影響などが考えられるが、実際のところ、考察が及んでいない。

文政～弘化期にかけて、作付順序は木綿の導入などによって延長され、芋・ソバなど多種類の作物が作付られるようになる。嘉永～元治期では、当主長兵衛が死去することに伴い小作地化が進展し、少種類の作付へと変化するが、慶応期以降は、文政期と同様な作付順序に戻る傾向がある。もちろん、小作地の手作地化が最大の要因であろう。すなわち、拡大と縮小を経て、当初の形態へと回帰する形態が高橋家の作付順序の特徴である。

(5) 労働力の変化

家族構成を確認できる史料は、「文久二(1862)年三月 西鹿田村宗目人別帳」¹³⁾のみである。高橋家は、嘉永4年に当主長兵衛没後、長男長平が家督を継いだ。この長平35歳の時に宗門改めが行われたことになる。長平家は、妻こと(31歳)、母よし(59歳)、長男

表4 田園覚帳にみられる雇用労働力

年号	雇用労働力	期間	年号	雇用労働力	期間
文政元(1818)年	● △	年季	天保7(1836)年	● ●	半季・夏季
文政2(1819)年	● ● △	夏季	天保8(1837)年	● ● △	不明
文政3(1820)年	● ● △	年季	天保9(1838)年	● ● △ △	月20日・不明・蚕雇・蚕雇
文政4(1821)年	● ● △	年季	天保10(1839)年	●	夏季
文政5(1822)年	●	年季	天保11(1840)年	●	夏季
文政6(1823)年	●	年季	天保12(1841)年	●	夏季
文政7(1824)年	●	年季	天保13(1842)年	●	春・夏季
文政8(1825)年	●	年季	天保14(1843)年	●	夏季
文政9(1826)年	●	年季	弘化元(1844)年	●	夏季
文政10(1827)年	●	年季	弘化2(1845)年	● ●	夏季
文政11(1828)年	●	年季	弘化3(1846)年	●	4月下旬～6月30日
文政12(1829)年	●	年季	弘化4(1847)年	● ● △ △	蚕雇・他不明
天保元(1830)年	●	年季	嘉永元(1848)年	●	不明
天保2(1831)年	● ●	年季	嘉永2(1849)年	● ●	半季・不明
天保3(1832)年	● ●	夏季	嘉永3(1850)年		なし
天保4(1833)年	● ●	半季・夏季	嘉永4(1851)年	●	不明
天保5(1834)年	● ●	半季・夏季	嘉永5(1852)年		以降、小作経営
天保6(1835)年	● ●	半季・夏季			

注1) ●は男子、△は女子を示す。また、数は人数を示す。

2) 表中の縦実線は同一人を示す。

高橋家所蔵：「田園覚帳」から作成

熊次郎（13歳）、次男作馬（6歳）、三男彦次郎（5歳）の計6人の家族で構成されている。文久2年の時点では、本人・妻・母・長男の4人が労働力として該当する。ただし、文久の宗旨人別には、分家等の記載がなく、また、それ以前の宗旨人別も現存しないため、長平の血縁関係については、判然としない。

文政元年～天保2年までは、年季労働力を1名ないし2名雇用しており、継続して多年にわたるものは1名のみで、女子の「おさん」は4年間継続である（表4）。ただし、文政元年～4年に関しては、2ないし3名であり、他の年より若干数が多い。女子「おさん」は上述の通り4年継続、男子「久五郎」は文政元・2年の2年継続である。これに対して、文政5年以降は天保2年のみ2名であって、他は1名である。この時期は、1年を通しての経常的労働力であるという点に特徴があり、家族労働に年季の奉公人を1名～3名加えた経常労働形態として捉えられる。

天保3年～嘉永4年は半季ないし夏季、すなわち農繁期（半季・夏季および4月下旬～6月30日などと記載されているもの）だけ雇う季節的労働形態へと大きく変化している。天保3年～8年までは2名、9年以降は1～4

名まで年によってばらつきがみられ、年ごとの対応に相違がみられる。ただし、天保3・4・5年の「亀蔵」、天保4・5・6年の「金次郎」は、それぞれ3年継続し、天保9年～弘化元年まで「菊蔵」が7年間継続する。それ以降は毎年変わるが、天保3年～弘化元年までは季節労働であっても、雇用人の継続性が指摘できる。

経常的な労働は家族労働力に一括され、季節的（農繁期）な臨時雇形態をとっており、農繁期への雇用労働力の集中的な投下がみられる反面、裏作である大麦・小麦に関しての労働力は家族労働力によって負担せざるを得ない状況になったといえる。農繁期を中心に行っている点では共通するが、養蚕関係の蚕雇が出現することは特筆される。以前に蚕雇は特記されておらず、この時期にいたって当家の養蚕が拡大したものと考えられる。このように、経常的雇用労働力は皆無となったが、反面で経営耕地規模は若干ながら増加しており、集約的な経営形態、すなわち合理化の方向へと進展したといえる。

嘉永5年以降は「雇」による季節的労働形態は姿を消し、小作経営形態へと大きく変化。小作経営についてみると（表5）、全体

表5 田園覚帳にみられる小作人と小作期間

年号	農民名 面積(畝歩)	金次郎 7.18	7.00	角太郎 7.00	重次郎 12.20	常吉 12.20	仙吉 4.20	20.06	彌七 4.12	四郎次 4.12	豊四郎 4.12	光五郎 4.12	丑蔵 7.18	福四郎 7.18	文次郎 7.18	栄蔵 7.18	岩蔵 17.15	5.07
嘉永6(1853)年	○	○							○									
安政元(1854)年	○	○							○				○					
安政2(1855)年	○	○							○				○				○	○
安政3(1856)年	○	○							○				○				○	○
安政4(1857)年	○	○								○			○				○	○
安政5(1858)年	○	○			○					○					○		○	○
安政6(1859)年	○	○			○					○							○	○
万延元(1860)年	○	○			○					○							○	○
文久元(1861)年	○	○			○					○							○	○
文久2(1862)年	○	○			○					○							○	○
文久3(1863)年	○	○			○					○							○	○
元治元(1864)年	○	○			○					○							○	○
慶応元(1865)年	○	○			○					○							○	○
慶応2(1866)年	○	○				○				○						○	○	○
慶応3(1867)年	○	○				○				○						○	○	○
明治元(1868)年			○			○										○		○
明治2(1869)年						○										○		○
明治3(1870)年	○	○				○										○		○
明治4(1871)年	○	○		○		○					○					○		○
明治5(1872)年				○			○	○								○		○
明治6(1873)年				○			○	○										○
明治7(1874)年																		
明治8(1875)年												○						

注1) ○は小作人として記載されたものを示す。

高橋家所蔵：「田園覚帳」から作成

で14名の小作人が記載されている。嘉永6年には小作人金次郎・彌七の2名で3筆1.9反を耕作している。安政5年には最大の7名が小作人となり、7筆で面積6.2反となった。安政6年～慶応元年までの7年間は小作人4名、6筆で面積5.4反と安定している。再び慶応2年に5名、7筆で面積6.2反となるが、明治元年以後、漸次減少する。

ただし、注記しておかなければならないことは、完全な小作経営は嘉永5年以降であって、嘉永元年～4年までの間は、季節的労働力と小作人が混在する、過渡期的性格をもっていることである。

以上のことから文政元年～天保2年までを年季を中心とした経常労働形態とし、同3年～嘉永4年までを農繁期を中心とする季節労働形態として捉えることができ、地主的側面を有しながらも、手作地の経営をも行う地主手作経営とみなすことが可能である。対して、嘉永5年以降を小作経営形態と大まかに掌握することができる。

(6) 高橋家における農業経営とその変化

稲作による安定的な経営の実現は、畑作卓越地域という地域条件を考慮すると困難で、畑作による経営に依存せざるを得なかった。そこで、畑作を基軸とした農業経営を大きく4時期に区分した。第I期は文政元年～天保2年までで、大豆を中心に、穀類を加えた自家消費目的の生産を基本とした経営に、木綿・蔬菜類などの市場性の高い作物を若干加えた多種類少量生産形態として捉えられる。また、労働形態からみれば、天保2年までは年季と家族労働を組み合わせ経常労働形態と見ることができる。作付順序に関しても、各地区で若干の相違は見られるものの、基本型を維持した安定的な順序をもっていた時期といえる。

第II期は天保3年～弘化4年までで、多種類化の萌芽はみられるものの、従来の大豆を中心とし、穀類を加えた基本型に、市場性を

重視した木綿やソバなどを加えた多種類多量生産へと変化した。また、労働形態からみれば季節労働がその主体となり、多種類に対応した労働の集約化が進展したことを示す。一方で、裏作の麦類の生産に関しては、家族労働への負担が増大する結果となった。季節労働により広範囲で商業目的の農業が展開された時期とみるができる。

第III期は嘉永元年～慶応3年までで、大豆と穀類の量を減らし、市場性の高い木綿・ソバなどを従来以上に拡大した少種類多量生産である。また、労働形態は小作経営であり、手作地を減少させた集約的経営へと変化した時期として掌握したい。

第IV期は明治元年～8年までで、大豆、雑穀、木綿、ソバなどがほぼ均等に生産される時期である。内容的には、前III期の少種類多量生産を継承しているものの、小作地の手作地化が見られることから、小作経営への依存度を低め、手作地の再構築をはかった時期と見られる。作付は地区内統一の傾向が強く、その順序も基本型に忠実となる。

高橋家の作物生産量は、地主経営という性格からも多かったと考えられるが、西鹿田村全体の生産量に比してどの程度なのか(表6)。「物産取調帳西鹿田村(明治九年分)」を利用するが¹⁴⁾、「田園覚帳」の明治9年には、収穫量が記載されていないため、8年の収穫量と比較することにした。小豆が20%、ソバが10%と高い比率を示すが、他の作物については全体の1割にも達せず、5%程度であることがわかる。高橋家が名主の系譜をもち、村内の上層農であったことは疑いないが、当時、家族労働力を中心とした手作地主経営であって、水田卓越地域のような大規模地主には、到底及ばない存在であったことがわかる。

また、「田園覚帳」中には蚕の収量が記されているが、「蚕三十籠」¹⁵⁾という記載がなされているため実際の生産量把握はできない。その収量は大まかに年々増加傾向にあったとい

える。また、養蚕のために重要な桑の植え付けは、冬の風除けの役割をもつ廻り桑（一筆耕地の外周に植え付けられる桑）、つまり畑地の畦に植えられていたことが地配図から読み

表6 西鹿田村と高橋家の生産量の比較

作物	西鹿田村 明治9年	高橋家 明治8年	比率(%)
米	180石	12石4斗	6.8%
大麦	175石	8石	4.5%
小麦	140石	7石2斗	5.1%
大豆	108石	2石2斗	2.0%
小豆	8石	1石6斗	20.0%
粟	40石	—	—
稗	30石	—	—
キビ	2石5斗	—	—
ソバ	25石	2石5斗	10.0%
岡稲	15石	1石	6.7%
菜	1石3斗	—	—
桂	2石	—	—
ゴマ	2石5斗	1斗	4.0%
芋	300石	—	—
繭	600斤	—	—
生糸	100斤	—	—
実綿	300斤	—	—
桑	5700貫目	1貫目	1%未満

西鹿田村の数値は、西鹿田行政区有文書：「物産取調書西鹿田村（明治九年分）」および高橋家所蔵：「田園覚帳」から作成

取れる(図5)。地配図にはヒトエナミと呼ばれる、畦に1列に桑が植え付けられる形態が見られ、フタエナミと呼ばれる畦に2列の桑が植え付けられる形態は見られない。両形態ともに、耕地を区画する役割を担っていた。

養蚕地域としてのイメージからは、畑地のかなりの部分に桑が栽培され、大々的な生産が展開されていたと考えがちだが、近世後期の段階では養蚕が特筆される存在であったとはいえず、本格的な養蚕の発展は明治中期以降を待たねばならない状況であった¹⁶⁾。

V. おわりに

本稿では、近世の農業経営とくに耕地利用方式を解明するために、上野国新田郡西鹿田村の高橋家に現存する農業記録「田園覚帳」の分析を試みた。その結果と課題は以下の通りである。

水田稲作は、金肥利用などから反当たり2石程度を維持していたものの、多大な余剰を

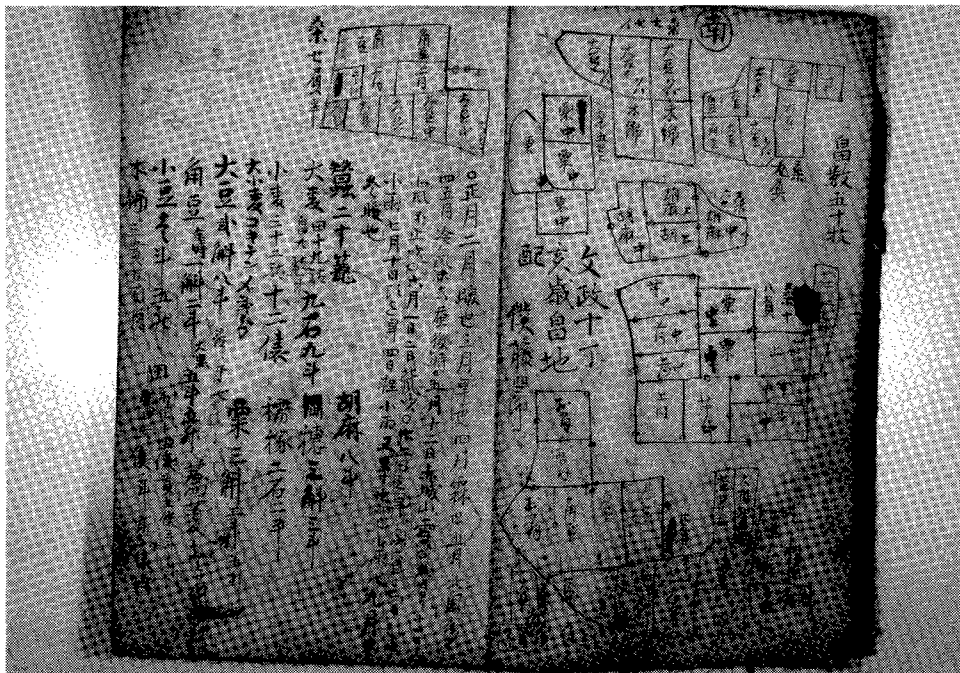


図5 文政10年の「田園覚帳」の記載内容

注1) 写真中の耕地境に見られる○が桑の植え付けられた位置。高橋家所蔵：「田園覚帳」から作成

生じることは困難で、畑作物に頼らざるを得ない状況であった。

畑作経営は4時期に区分することができ、第1期は文政元年～天保2年までで、大豆を中心に、穀類を加えた自家消費目的の生産を基本とした経営に、木綿・蔬菜類などの市場性の高い作物を若干加えた多種類少量生産形態として捉えられる。また、労働形態からみれば、天保2年までは年季と家族労働を組み合わせた経常労働形態である。作付順序に関しても、各地区で若干の相違は見られるものの、当初の基本型を維持した安定的な順序をもっていた時期といえる。

第II期は天保3年～弘化4年までで、多種類化の萌芽はみられるものの、従来大豆を中心とし、雑穀を加えた基本型に、市場性を重視した木綿やソバなどを加えた多種類多量生産へと変化した。また、労働形態からみれば季節労働がその主体となり、多種類に対応した労働の集約化が進展したことを示す。一方で、裏作の麦類の生産に関しては、家族労働への負担が増大する結果となった。季節労働により広範囲で商業的目的の農業が展開された時期とみることができる。

第III期は嘉永元年～慶応3年までで、大豆を中心に、雑穀を加えた生産を減少し、市場性の高い木綿・ソバなどを従来以上に拡大した少種類多量生産である。また、労働形態は小作経営といえ、より労働集約的な経営へと変化した時期として掌握したい。

第IV期は明治元年～8年までで、大豆、雑穀、木綿、ソバなどがほぼ均等に生産される時期である。内容的には、前III期の少種類多量生産を継承しているものの、小作地の手作地化が見られることから、小作経営への依存度を低め、手作地の再構築をはかった時期と見られる。作付は地区内統一の傾向が強く、その順序も基本型に忠実となる。

高橋家の作物生産量は、西鹿田村全体で小豆が20%、ソバが10%と高い比率を示す一方

で、他の作物については全体の1割にも達せず、5%程度であった。高橋家が家族労働力を中心とした手作地主経営であったことを考慮すれば、村内の同様な手作地主においても高橋家と同様な作付作物や方式が村内である程度行われていたものと考えられる。

文化～明治初期の養蚕については、廻り桑を中心としており、耕地に桑が植え付けられることはなかった。養蚕が農業経営上未だ副次的な段階に止まっており、主たる地位を占めるのは、明治中期以降になってからである。

一農民である高橋家の史料「田園覚帳」を利用することにより、詳細な耕地利用方式を中心とした経営実態の一側面を抽出できた。しかし、この断片を地域に対応させるためには、他史料による比較検討が課題となる。

(日本大学・非)

〔付記〕

本稿をまとめるにあたっては、立石友男教授をはじめとする日本大学文理学部地理学教室の諸先生方にご指導を賜った。また、史料閲覧に際しては、文書所蔵家の高橋守夫様、笠懸野岩宿文化資料館の小菅将夫様に大変お世話になった。記して以上の方々に厚く御礼申し上げます。

なお、本稿の骨子は歴史地理学会第170回例会において発表した。

〔注〕

- 1) 農書研究の意義については、古島敏雄(1980): 農書を読む意味(古島敏雄編『農書の時代』農文協)、8～29頁、岡 光夫・三好正喜編(1981): 農書の成立—ひとつの仮説—(『近世の日本農業』農文協)、316～346頁などがある。農書研究に大きく貢献した資料としては、山田龍雄・飯沼二郎・守田志郎他編: 『日本農書全集(第I期全35巻)』、徳永光俊・佐藤常雄・江藤彰彦編: 『日本農書全集(第II期)全37巻』、農文協がある。第I期は全国的なものから地方の農書までを主に収録し、前半の史料と後半の史料解題とから構成される。対して、第II期は農書を収録するとともに、地方の農業記録にまで及んでいる。

- 2) 個々の農書の研究は、前掲1)の解題部に集約できるが、徳永光俊(1981):近世農業生産力の確立をめぐる一近世前期農書の世界一、(岡光夫・三好正喜編『近世の日本農業』農文協), 46~89頁, などがあり, 近世農法を探究したものが多い。
- 3) 有馬洋太郎(1994):明治初年における農家の休日一北関東平地林地域の在村耕作地主の日記から一, 農村研究, 79, 9~20頁。地理学でも, 従来の農業経営などの解明の他に, 農事日誌などから農村生活の実態を明らかにして, そのうえで村落に対応させるといった視点, 利用法が見られる。中西僚太郎(1996):明治末期~昭和初期の茨城県西部における農村生活の構造, 歴史地理学, 38-4, 21~40頁。
- 4) 有藪正一郎(1986):『近世農書の地理学的研究』古今書院, 301頁。
- 5) 芳 即正(1953):近世末期薩摩藩の農業技術と経営一名越家「耕作萬之覚」を中心として一, 社会経済史学, 18-5, 50~69頁, 徳永光俊(1979):近世大和の農業技術一山本家農書の分析一, 農林業問題研究, 15-2, 41~48頁, 泉 雅博(1986):幕末明治初年における豪農の農業技術一下野国田村家について一, 農業経済研究, 58-1, 1~18頁, 秋山伸一(1985):武蔵野台地における特産物地域の形成過程一薩摩芋の生産をめぐる一, 立教日本史論集, 第三号, 18~35頁, などがある。
- 6) 西鹿田村の耕地復原については, 山崎達夫(1996):群馬県所蔵地籍図の耕地記載内容とその利用, 地理誌叢, 38-1, 61~72頁, を参照していただきたい。
- 7) 高橋守夫家所蔵:『田園覚帳』。この『田園覚帳』に関しては, 稲作農業を中心とした, 田村伸之(1956):幕末地主層における農業経営の様相一新田郡西鹿田村高橋家『田園覚帳』の分析一, 群大史学, 7, 39~47頁があり, 笠懸村誌編纂室(1985):『笠懸村誌上巻』, 笠懸村, 1050頁においても掲載されている。
- 8) 『田園覚帳』の後半部「農作業覚帳」の中に以下の記述がある。

江戸

- 一 小槽老升 百四十匁 中緒
小肩多シ 百四十八匁目

江戸

- 一 槽(ヌカ)一升百三十五匁 中 小米少し。
江戸
一 同一升百三十匁 小米尚少し。丙午歳
赤槽一升中緒百四十八匁
上目百五十三匁
赤俵下り 百四十五匁中緒
一 度漉
一 油かす 粉一升貳百十五匁

途中に見られる「丙午歳」は, 史料の期間を考慮すれば, 弘化3年とすることが妥当であり, すでにこの時期に江戸より金肥を購入していたことが伺える。

- 9) 岩崎公弥(1994):尾張地域における近世綿作の地域的特色, 歴史地理学, 36-4, 1~25頁。近世期における畑作物の作付を, 地方史料を用いて綿作との関係から明らかにしている。
- 10) 前掲8)
- 11) 作付体系の現代的意味については, 栗原浩教授定年退官記念出版会編(1984):『耕地利用と作付体系』大明堂, 269頁によった。
- 12) 作付作物と耕地等級との関係について, 「農作業覚帳」では, 「おかばハ上畑よからず, 地だけ少き地も善し…」とあるが, 耕地等級との関係記載は他にない。また, 「おかいネ毛白ハ砂地よし, 赤毛ハ湿地よし。…」など耕地条件との関連記載は他にも見られる。
- 13) 西鹿田行政区有文書(笠懸町寄託):「文久二年三月 西鹿田村宗旨人別帳」
- 14) 西鹿田行政区有文書(笠懸町寄託):「物産取調書西鹿田村(明治九年分)」
- 15) 単位の「籠」は, 収繭用の籠であることが聞き取り調査によって判明しているが, その量は, 籠の大きさによって10~20kg程度であったと思われる。
- 16) 当該地域の養蚕に関して, 山田武麿・井上定幸(1959):群馬の生糸(地方史研究協議会編『日本産業史大系 関東地方篇』東京大学出版会)257~286頁では, 近世期は, 劣悪な耕地条件下の山村で, 斜面地に桑が植え付けられていたことが述べられている。群馬全体に桑が植え付けられ, 養蚕が展開されるのは横浜開港以後であると説明されている。